

令和3年度

# 第9回 座談会

期 日：令和4年1月30日（日）  
9：30～12：00

Zoom ミーティングによるオンライン開催

公益財団法人 日本教材文化研究財団

## テーマ：「幼児教育と小学校教育の接続について」

1. 開会のご挨拶
2. 自己紹介
3. 【テーマ1】佐野市あかみ幼稚園ー小学校の経験を幼稚園、こども園の立場から実践での協働連携やカリキュラム、子どもを見る視点の共有  
提案者 <学校法人中山学園 理事長 中山 昌樹>
4. 【テーマ2】園の活動から小学校への学校体制や自治体の取り組み  
提案者 <東京都大田区立松仙小学校 主任教諭 松村 英治>
5. 【テーマ3】自治体や国の架け橋プログラムとこれから  
提案者 <國學院大學 教授 田村 学>
6. 【総括】幼児教育と小学校教育の接続についてのこれからへの期待や方向性

### [ご出席者]

コーディネーター 秋田 喜代美 (学習院大学 教授 / 財団評議員)  
パネラー 中山 昌樹 (学校法人中山学園 理事長)  
松村 英治 (東京都大田区松仙小学校 主任教諭)  
田村 学 (國學院大学 教授)



## 第9回座談会

日 時 令和4年1月30日（日）

### 1. 開会のご挨拶

#### ○三好

公益財団法人 日本教材文化研究財団の三好茂徳と申します。本日は、お忙しいところ座談会にご出席を賜りまして、誠にありがとうございます。

日本教材文化研究財団では、今後の公益事業の指針作りに役立てるために、有識者の先生方をお招きしまして、毎年、座談会を開催させていただいております。

今回で第9回目となりまして、今回のテーマは「幼児教育と小学校教育の接続について」であります。現在、文科省の中央教育審議会の中でも議論がなされている重要なテーマでございます。

このテーマの座談会を企画するに当たりまして、文部科学省「幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会」の委員を務められ、教育心理学、発達心理学、学校教育学など幅広いご専門分野で長年ご活躍され、当財団の評議員でもあられます学習院大学教授の秋田喜代美先生にコーディネートをお願い申し上げました。

秋田先生には、平成25年より約10年近く当財団の評議員としてご活躍いただいております。平成26年度からは当財団の保育・幼児教育の研究部会でも長年お世話になっており、平成26～27年度は「子どもの挑戦的意欲を育てる保育環境・保育材のあり方」、そして平成28～29年度は「これからの時代に求められる資質・能力を育成するための幼児教育指導」、また平成30～令和元年度は「幼児期の深い学びの検討 探究過程の分析」、さらに令和2年度からは「乳幼児期からの深い学びを支える環境と素材・メディアの分析」のご研究の統括をお願いしております。

本日は、新型コロナウイルスの感染拡大の状況下でありまして、オンライン開催とさせていただきますましたが、秋田先生には座談会の進行や内容のご検討、ご準備などで多大なお力添えをいただきました。この場をお借りしまして厚く御礼を申し上げたいと思います。

そして、パネラーといたしまして、國學院大學教授の田村学先生、そして学校法人中山学園理事長で認定こども園あかみ幼稚園園長の中山昌樹先生、また、東京都大田区立松仙小学校の松村英治先生3名の先生方にご登壇をいただいております。皆様大変お忙しい中にもかかわらず、ご参加をいただきまして、誠にありがとうございます。

3名の先生方は、座長の秋田先生よりご紹介いただきまして、田村先生と中山先生は、現在、文部科学省の「幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会」の委員としてもご活躍されております。また、松村先生は、東京大学大学院で秋田先生に学ばれたご関係と伺っております。

3名の先生方ともに教育現場での豊富なご経験を通じて、『幼児教育と小学校教育の接続』についての様々なご実践のお話や、課題、また目指すところなど、お考えをご披露いただけるものと期待しております。

本日は、このようなすばらしい先生方のご意見、ご提言を賜り、今後の財団の活動の指針とさせていただきますたく存じます。

長時間にわたり、誠に恐れ入りますが、どうぞよろしくお願い申し上げます。それでは、座長の秋田先生にお返ししたいと思います。秋田先生よろしくお願い申し上げます。

## ○秋田

それでは、本日これから長時間にはなりますけれども、始めさせていただきますと思います。

本日、テーマは「幼児教育と小学校教育の接続について」ということで、先ほど三好事務局長から既にお話がありましたように、今、一番ホットな話題の一つというところで、お話を頂くこととなります。

私としては、これ以上のベストのメンバーはいないのではないかと思うほど、ご専門のそれぞれの深い見識の先生方にお話を伺えますことを、大変ありがたく思っているところでございます。

## 2. 自己紹介

○秋田 まず自己紹介から始めさせていただきますと思います。それぞれ保幼、幼保小の連携接続や生活科、また田村先生は元視学官などお勤めになられ、本当に広く、いろいろなことがご専門であられるわけなのですが、それぞれ何らかの今日のテーマに関わることを、まず最初にちょっと自己紹介でお話しただけならと思っているところでございます。

私のほうは、もともと小学校の授業研究や幼稚園の園内研修に関わらせていただいたご縁から、1990年代後半に文部科学省が研究開発学校で、幼小の連携接続ということについて始めた最初の園が、中央区立有馬幼稚園、小学校でございました。そのときに

その場所に、現在の架け橋プログラムの座長の無藤隆先生と共に、一緒に入れさせていただいたところをご縁になっております。その後、幼保小連携接続ということに大変関心も持ちながら、歩みを進めさせていただいているというところです。

実際には、文部科学省からの報告書等もださせていただくにもお手伝いはさせていただいたのですが、実際になかなか課題も多く、全国に広がりにくいというところがあります。それが今回の架け橋プログラムにつながっていると思っておりますので、ぜひその辺り、これからの在り方について具体的にお話を伺って、また学ばせていただきたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

それでは続きまして、ご発表の順ということで、中山先生からまず自己紹介をお願いいたします。

○中山 皆さん、おはようございます。中山と申します。今日はよろしくお願いいたします。

私は栃木県の佐野市というところ、佐野市というのは栃木県の一番南の端になりますが、その佐野市で認定こども園を運営しております。敷地の中には子育て支援センターですか、学童保育、あるいは職員のための企業主導型保育ですね。福利厚生的にそういったものを用意したりとか、思いとしては保育、子育て支援のワンストップな施設を目指しているわけですが、まだまだ取り組みとしては未熟なものだというふうに思っています。

そしてこの後、幼児教育と小学校教育の接続のお話になっていくわけなんですけど、私自身、どのように関わってきたかを振り返ると、今日お伝えする、地元赤見地区の公立小学校との接続のプロジェクト、7年ほどやってきているのですが、そこで随分私自身、考え方が変わったりとか、少しではありますが成長できたと思っています。それ以前はどちらかという、何かあると小学校の先生に文句じゃないですけども、もっとこうしてくれとか、一方的に思いを伝えているだけだったんですけど、やはりこの7年間の取り組みをさせていただくことで、地道にある意味懐に入らせていただいて、地道に関係づくりをしていく中で道が開けていく、まだ開けているわけじゃないんですけども、開けるような期待が今ありまして、お互いに尊重し合うような、そういう関係づくりが大事だと今思っているところです。

今日は、さらに先生方からご意見など頂きながら、勉強させていただきたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

○秋田 中山先生、ありがとうございます。

それでは、松村先生、よろしくお願ひいたします。

○松村 おはようございます。松村英治と申します。大田区立松仙小学校で、今教員10年目になります。学校は2校目です。先ほどご紹介いただいたように、秋田先生のご指導の下で卒業論文と修士論文を書かせていただきました。卒業論文では、生活科の授業の中で、子どもがどういうふうにご自己肯定感を高めていくか、また修士論文では、小学1年生が入学したときに、クラスのルールをどのように作っていくか、その意味をどういうふうにご共有していくかということをごまとめております。

専門は生活科と総合的な学習の時間で、最近は高学年の担任が多いのですが、以前1年生の担任をしていたときに、スタートカリキュラムの実践をする機会を頂きまして、そこで2年間スタートカリキュラムを自分で実践をしたり、田村先生にお声掛けいただき、国研の資料も一緒に作成をしたりする中で勉強させていただきました。

保育園や幼稚園との交流ということでは、本校は全学年4学級で結構大きな学校なので、充実した交流活動をどう実現するかということが課題だったので、その辺りのことも、後でお話しさせていただきたいと思っています。

この架け橋特別委員会の動きについては、ホームページから追っ掛けてはいるのですが、ちょっと全体が分かっていないところもありますので、今日はそういうところも勉強させていただくことを楽しみにしています。よろしくお願ひします。

○秋田 松村先生、どうぞよろしくお願ひします。奥さまは保育士さんということで、元でしょうか。今もですかね。

○松村 はい、今もです。

○秋田 ご家庭での保幼小連携ではないのですが、いろいろな対話をされていることご思います。よろしくお願ひします。

○松村 よろしくお願ひします。

○秋田 では、田村先生、どうぞよろしくお願ひいたします。

○田村 國學院大學の田村です。今日はよろしくお願ひします。

秋田先生をはじめ、事務局の皆さんからお声掛けをいただきまして、大変楽しみに座談会にやっ来てまいりました。直接お会いすることができれば一番良かったんですけども、残念ながらではありますが、いい時間にさせていただければと思いますし、学んでいきたいと思っています。

それから、現場で活躍されている松村先生や、架け橋特別委員会でご一緒させていただ

いている中山先生から、いろいろと今日は教えていただければと思います。よろしくお願  
いします。

私は、新潟で教員をしております、上越市立大手町小学校、上越教育大学の附属小学  
校などで勤務しました。生活科はもちろん、総合的な学習の時間なども熱心に研究開発を  
していた学校で、現在の礎を育てていただいたということになります。

大手町小では生活科、上越教育大学附属小では、低学年のカリキュラムを生活科を中心  
につくっていき、幼小連携をやっていた時代になります。その後、文部科学省で、調査官、  
そして視学官ということでお務めをさせていただきました。

調査官のときは、生活科と総合的な学習の時間の担当でしたので、幼保小連携といった  
考えが生まれるタイミングでした。調査官をしていたときの、学習指導要領の前回改訂、  
平成20年の改訂のときに、解説の中に「スタートカリキュラム」という言葉を位置付け  
たということになります。今回の改訂、平成29年の改訂に関しては、さらに総則の中にも  
明示されて、幼児教育と小学校教育が法令上も明確に接続が示されたと思いますが、そ  
うした動き出しがあった際の担当をしていたということになりますので、その辺を皆さん  
と一緒に確認できればと思います。

現在、國學院大學で生活科や総合的な学習の時間を学生に指導しています。今回の架け  
橋特別委員会、経産省の産業構造審議会の臨時委員などもさせていただいています。どう  
ぞよろしくお願いいたします。

○秋田 ありがとうございます。お三方の自己紹介を伺っただけでも、わくわくして、  
楽しみになっているところです。今日は順に話題提供のパネラーの先生方から、少しずつ  
ご自分のテーマというところで、事例などを共有してお話を頂いて、ディスカッションす  
るというような形で、それを回していくようにしたいと考えております。

そこで一番最初に、中山先生のほうから、佐野市のあかみ幼稚園のところで、こども園  
理事長のお立場から、いろいろお話を頂けたらというふうに思っております。

それでは、中山先生のほうから、まずよろしくお願いいたします。

**3. 【テーマ1】 佐野市あかみ幼稚園－小学校の経験を幼稚園、こども園の立場から実践  
での協働連携やカリキュラム、子どもを見る視点の共有** <提案者 中山昌樹先生>

[参考資料：20220130\_jfecr\_th1\_nakayama.pdf]

○中山 ありがとうございます。本当に秋田先生、それから田村先生、あと今日いらっ  
しゃいませんが、無藤先生、さまざまな先生のお力で、この架け橋プログラムのこのタイ  
ミングになっているんだなと思いますと、そこに少しではありますけれども、関わらせて  
いただいていることを、ありがたく思いますし感無量です。今日はよろしくお願ひします。  
それでは、画面の共有をさせていただきます。

「幼児教育と小学校教育の接続について」ということで、連携の在り方ですとかカリ  
キュラムの開発、あるいは子どもを見る視点ということで、お話をさせていただきます。

それから、すみません、先ほどご紹介で、園長という肩書きをお聞きしたんですが、私  
がちゃんと伝えていなかったのかもしれませんが、今は園長は別な者に交代して理事長に  
なっていて、どちらかという運営系のほうに関わらせていただいております。

まず、ローカルな背景ということで、栃木県の佐野市、先ほど栃木県の一番南の端です  
というふうに申し上げましたが、人口が約11万人。人口減少が進んでいると。出生数を見  
ただけでも、ちょっと前まで1,000人いたと思ったんですが、今では600人台ま  
で生まれるお子さんの数も減ってしまして、人口も減り続けているという、そんな街です。

そして、保育施設の数はそのに書いてあるんですが、非常に佐野市を特徴付けているの  
は、公立保育所は公立であります、それ以外は民間ということです。幼稚園、あるいは  
幼稚園由来の認定こども園、全て民間ということで、教育委員会と関わりが薄かった地域  
であります。関わりが薄かったというか、ほとんど守備範囲として考えていらっしやらな  
かったんじゃないかと思うぐらい距離が遠かったです。

しかし、先ほどちょっと自己紹介でも申し上げましたが、地元の公立小学校と接続プロ  
ジェクトを始めて7年間やってまいりましたが、その中で、少しずつ関係づくりが出来上  
がってきまして、教育委員会の指導主事の先生とチャンネルが今できています。まだそう  
いう部署、組織的な部署ができていないわけではないのですが、そのような関係づくりが一  
定進んでいるということが言えるかと思ひます。

その一方で、昨年、選挙がありまして、市長さんが変わられました。そして、まだ分か  
りませんが、幼児教育、保育にも関心が比較的ある方だというふうにお見受けして  
おりまして、今後の子ども政策が注視されるころかなというふうにお思ひしています。

このような佐野市というところでのお話になります。

1つの事例として、公立小学校と行ってきた接続プロジェクト、このお話を今日は中心  
にお伝えしたいと思ひます。



平成27年に始まったものです。そもそものきっかけというのは、その年の、前の年の6月頃、夏休みの前でした。卒園したお子さんの保護者から、連絡というか電話がかかってきまして、もう泣きながらの話だったのですが、わが子が学校で非常に苦しんでいるということでした。どういうことかということ、かなり学力をめぐるの取り組みで、厳しいプレッシャーがかけられて、それがお子さんにだけではなくて、保護者にまで、おうちでもちゃんとやってくださいみたいな、そういうことで親子で苦しんでいるといった状況でしたので、先ほど言いましたように、その頃の私というのは、すぐかっとなって、もう火が付くと、その学校に飛んでいっちゃうような性格でしたので、もう本当にその校長先生に直談判に行こうと思ったんです。しかし、ここが運命の分かれ道だったのですが、日頃から世話になっている、栃木県には幼児教育センターというのが、その当時からありまして、その幼児教育センターの先生に「こういうわけなんですよ、今からもう学校行って文句言ってきます」みたいなこと言ったら「まあまあまあ」と。「けんかしても何もいいもの生まれなから」ということで、そこで接続のプロジェクトをやりたいという提案を頂いたんです。そこは本当に大きな分かれ道だったと思います。その幼児教育センターに相談するかしないかで、全く別な方向に行っていた話かと思えます。

ですが、運よくそのような接続のプロジェクトを進めることになったのですが、とにかくどう進めていいかも分からないので、その幼児教育センターの先生に手取り足取り教えていただいて、まず協力してくれる校長先生を探しなさいとか、こういうことで教育委員会に言ってみなさいとか、いろいろとご指導いただきました。運よく、地元の赤見小学校という公立の小学校の校長先生が興味を持ってくださって、やりましようと言ってくださったので、話が進みまして、市の教育委員会にも行きました。最初はちょっと消極的だったのですが、県の幼児教育センターの後押しもあって、指導主事の先生がそこに参加してくださることになりました。

そして、最初の年というのは、結構熱心に研究会の数も多くて、8回ほど集まりを持ちました。小学校の先生にとっても大変だったんじゃないかと思うのですが、これは保育参観、授業参観、別ですね。保育参観と授業参観は本当に回数多くやったのですが、それ以外に、机に座って話し合いをする研究会を8回やりました。

そこでは、単なる小学校への適応対策にならないようにということを心掛けて、接続したいわけですがけれども、まずきれいごとじゃなくて、何が障壁となっているのか、それをどう越えることができるのだろうかというところですね。そこで目指していこうというこ

とで、まずは保育を見たり授業を見たりしながら、感じたことを伝え合いました。

そして実践のエピソード化、その保育参観、授業参観の中からエピソード化していったものをカリキュラム化していきまして、スタートカリキュラムとアプローチカリキュラムが一体化した、接続カリキュラムっていうものを開発したわけです。そして2年目以降というのは、やはり続かないといけないと思ひまして、集まってお話しをする研究会自体は年3回ほどに回数を減らしましたが、やはり授業参観、保育参観っていうのが非常に重要ですので、それをを行いながら、今、カリキュラム・マネジメントを続けているという、そうした取り組みになります。

そして本当に、この取り組みで教育委員会の先生ともいろいろお話できるようになるとか、いろいろ道が開ける可能性が見えてきました。これは非常にこつこつとした地道な取り組みでありますけれども、その意味というか、意義というのはやはり大きいなというふうに感じています。

課題としては、そうは言っても、今後どこまで続けられるのかっていうのが、やはり常に心配事としてあります。例えば校長先生が異動になって変わられたら続けてくれるのか、もうやめまして言われちゃうのかですとか、その教育委員会の指導主事の先生も、ずっと続けて関わってくださっているのですが、その方が異動でいらっしやらなくなったらどうなっちゃうんだろうかという、取り組みの、プロジェクトの継続というのが課題になっているなというのが、一つあります。

それと、なかなか7年やっても、街全体に広がらないんですね。なぜ広がらないのかなと思います。その1つの理由としては、小学校と接続する際に幼児教育の施設の保育が、よく言えば多様ですが、ちょっと上から目線になって恐縮ですが、ばらつきがあると。よその園の文句とか批判を言う気はさらさらないので、いろいろあり過ぎて、小学校側としても教育委員会としても、どう接続していいのか、たぶん苦慮されているのではないのかなんていうふうに思うんです。

そういう中で、街全体の保育の質、幼児教育の質というのを、どう高めていくか、基本の原理、原則のところをどう一枚岩にしていくのか、保育の内容などは多様であるべきだと思うんです。金太郎飴みたいになる必要はないと思うので、多様な保育内容であるべきだと思いますけれども、基本的な考え方、幼児教育に対する考え方などを、もうちょっと共有していくことで広がるのかなと思いますと、まだまだそこに課題が見えているという状況です。

このようなプロジェクトを行いまして、連携の関係を今構築していると。まだまだ始まったばかり、7年やっていますけれども始まったばかりという印象です。

そして次に、子どもの見方というか、幼児教育と小学校教育の違いですね。きれいごとじゃなくて、やはり違うなど。その上で、どうつながろうかなということなんですが、ちょっと私の理解が違っていることもあるかもしれませんがまとめてみました。

まず、園児とか児童の発達に基づいたそれぞれの原理・原則ということで言いますと、幼児教育の場合は、環境を通して行う教育・遊びを通しての総合的な指導ということになるわけです。言語による言葉がけも大事ではありますが、比較的、環境、物とか事柄とか状況をつくって、子どもが自ら関わっていくことという、そこで学びが結果的に生まれていくという、間接的な関わりが多いのかなというふうに理解しています。

小学校、ちょっとこれは自分が間違っているかもしれませんが、授業などを見せていただいて、非常に言葉が大事にされていて、授業というところで進めていく、体系的に。そういった印象でした。

目標の違いというのもやはりあるなと思ひまして、幼児教育の場合には、育ちゆく方向性を示していく、方向目標であるのに比べて、小学校ではその時期までにこういうものやっていくという到達目標であるというふうに理解しました。

それから3番目の「めあて」と「手立て」の共有ということですが、幼児教育では園児がとにかく遊びたいから、面白いからその取り組みをするんです。そこでは子どもたち、園児たちは先生がどんなことをめあてとしているかは、ある意味関係ないわけです。保育者がどんなことを願っているかとかは関係なく、そのことが面白いからやりたいという。ただ結果として、その遊びをしたことによって、たくさんの学びを得ていくというのが、幼児教育なのかなと思います。

一方、授業を見せていただいてすごく感じたのは、小学校では児童と教師が「めあて」、それから「手立て」というのを、もうあらかじめ共有して学びを進めていっているという、非常に計画性とか整然とした印象を感じました。

それから最後の、授業以外の生活における活動・取り組みですが、例えば身の回りのことですね。手を洗ったり、うがいをしたりとか、片付けをしたりとか、飼っている動物の世話をしたりとか、本園では園児の中にその必然性があるってでないと、なかなかそのことに園児自身が取り組んでいかないということがありますので、必要性が園児自身の内面にあるというふうに理解しています。

一方、小学校も本来そうではないのかなと思うのですが、小学校には黄金の3日間というのがあって、入学して3日以内に全部決めるんだというふうに、そのときの校長先生がおっしゃっていて、びっくりしたのですが、ただ、これは接続のプロジェクトを進めていくところで、ちょっとそれをやらないで進めてみようというふうに、指導主事の先生の助言がありました。例えば黒板係という、黒板を消す係があるのですが、黄金の3日間においては、入学して3日以内に、誰が黒板係になるか決めて進めていったそうなんです、それを決めずにやってみよう。すごく小学校の先生方は不安がっていましたけど、大丈夫なんだろうとか、毎回先生が黒板を消さなきゃいけないのではないかと心配されていましたが、それをやってみたんですね。やってみたら、われわれはもう予想していたのですが、黒板係が決まっても、黒板を授業を終わった後、消したいって思う子が出てくるんです。これは予想どおりというか「先生、消してもいい？」っていうふうに。それが何人も結構出てきて、黒板消しの数が足りないですから、やりたくても待っている。やれないで我慢している子たちが出てきたと。これ、小学校の先生から聞いた話です。それが何日も続くと、だんだんいつもやりたくてもやれない、黒板を消したくても消せない子たちから不満が出てくるんです。「私も消したいのに、いつも誰々さんばかりで」というような。

そこで、話し合いを持ったそうです。みんなでやりたいけど「どうする？」って言ったら、当然本園でも経験もありますから、それは順番でやったほうがいいとか、簡単に子どもたちは考えられるわけです。それで、そこで結果的に順番でやるということで黒板係が決まっていた。黒板係以外の係もそのように決まっていたし、中には、今までなかった係まで生まれたと。確か上履きを体育館に行くときにそろえる、上履き係っていう、今までなかった係も生まれたっていうふうに聞いています。

そういうことで、違いがある中で、それでも歩み寄りつながったりすることは可能ではないかなって非常に感じた経験でした。

その上でまず何が違うか、どうやったらつながれるのかということ話を話し合いながら、徐々にカリキュラムを開発していったんです。

3つの枠組みというか、柱立てについては、幼児教育センターの先生のご指導で、小学校の先生にも馴染みのある枠組みというのは、知・徳・体でしょうということで、「学びの芽生えの軸」と「協同性の育ちの軸」、「生活の自立の軸」の3本柱でカリキュラムを構成することになりました。

秋田先生から確か、OECDでも、この日本の伝統的な知・徳・体の視点というのは、非常にいいものだというふうに評価が高いということも聞いておりました、ああ、そうなんだとあらためて勉強になったところです。

そして、ちょっと細かくて見づらんですが、その知・徳・体でカリキュラムを開発しました。真ん中を見ていただきますと、接続期ということで、期待・憧れということで、つながっています。幼児教育と小学校教育で別になっていないんです。しかし、架け橋プログラムの中で学ばせていただいて、今ご覧いただいているカリキュラムは、幼児教育の1月から小学校教育の6月までで、3カ月、3カ月で合計6カ月しかないので、ちょっとこれは期間が短いかなと思ひまして、これを2年間で見直していきたいと今思っているところです。

ちょっと細かくて見えないのですが、それぞれ活動例も挙げながら、そこに10の姿が書き込まれています。ちょっと細かくて見えないのですが、10の姿でそれを語り合うということが、今行われているわけです。知・徳・体と3枚になっていますね。

それで、今続けているところですけども、今後どんなことが課題になるのかなというのを、最後にお話ししたいのですが、まず幼児教育が非常に可視化しにくいというか、なかなか見えにくいので、例えば環境を通して行う教育というのを、いかに分かりやすく、これを説明していくのか、説明っていうのは、小学校の先生ですとか、保護者とか地域の方に向けてです。そこが一つまず課題であるのかなと。それは、架け橋プログラムを学んでいくときの教材とか、研修の在り方に関わってくるのかななんていうふうに思います。

ここでちょっと思っているのは、動画です。それはリアルにオンラインでもいいですし、オンデマンドでもいいのですが、保育を見ながら、そこに解説を入れていく、実況中継的な解説を入れていくというのが非常に有効だなというふうに思っています。というのは、保育を1時間とか見ていただいても、やはり普段見慣れていない方たちには、やはり分かりにくいんだなというふうに思うんです。

最初のプロジェクトの年に、赤見小学校の校長先生に保育を見ていただいたときに、校長先生が「担任の先生は何にもやらないんですね。遊んでいるだけです」っておっしゃって、それは今思えば、環境を通して行う教育がよくできていたっていう、それはありがたいお言葉だったわけですけども、保育のどこで何が起きていて、それをどう見るかっていうのは、やはり本当に回数見ないと、なかなかお伝えできないので、その点、動画を見ながら解説をそこで実況中継的に入れていくというのは、非常に有効なのではないのか

ななんていうふうに思っています。

それから、地域で多様なプログラムが作られないといけないなと思いつつ、教育委員会などがリーダーシップを取れる地域というのは、かなり体系的に行けると思うのですが、佐野市のような民間ベースで、ある意味、言葉は適切ではありませんが、何でもありの地域ですと、やはり園児募集で引っ張られちゃうというのかな、親たちはあれもできて、これもできるような保育をしてほしい、そういう園に子どもを入れたらいいという、やはり経営者はそっちに流れていきますので、なかなか指針、要領に沿った保育が構築できない。民間ベースでいろんなこと、自由に、ある意味勝手にできちゃう地域というのは、保護者と関係づくりをきちんとして、やはり子ども時代、小学校就学前ってのはいっぱい遊ぶのが大事なんだ、それが学びの基礎になるんだっていうところを相互理解しながら、さらに協働的な関係をつくっていかないと、非常に厳しいだろうなというふうに思っています。

その他は、そういった取り組みをどう評価していくのかというのは、ちょっと私には分からないので、先生方のご意見を頂きたいと思っていますが、最後に佐野市の中に何らか、教育委員会等が中心となった取り組みを支えるプラットフォームというものが、やはりないと続けられないな、なんていうふうに思っています。

そこに秋田先生から子ども基本条例、東京都などの先進的な事例のことを聞かせていただいたのですが、そういった条例などもつくることで、ある意味楔を打つというか、いつの間にか取り組みがなくなってしまうようなことが防げるのかと思いますので、今後取り組んでいきたいと思っています。

以上、提案のほうを終わりにしたいと思います。ありがとうございました。

○秋田 中山先生、ありがとうございます。ポイントをまとめて、大変分かりやすくお話をいただきました。これを受けまして、自由討論ということで、一方的な質問ではなく、それぞれつながりながら、いろいろ皆さまマイクはミュート外していただいて、適宜お話しただけならと思うのですが、いかがでございますでしょうか。

松村先生からどうぞ。

○松村 ありがとうございます。感想から始めたいと思うのですが、その学力がつかないという相談から始まったことで、自分も1年生の担任をしていた経験からすると、やはり校内の他の教員からのプレッシャーみたいなのが正直あって、きちんとさせないといけないとか、校長先生が教室に回ってきたときに、ちょっとわちゃわちゃしていたりする

と、後で呼ばれるんじゃないとか、そういうプレッシャーを受けてしまうと、きちんと座らせるとか、話を聞かせるとか、おとなしくさせるとか、形みたいところがどうしても大事になっていって、子どもの思いとか願いじゃなくて、きちんとさせることが優先になってしまうがあったなと思います。それは校内の教員からだけじゃなくて、保護者からも授業を参観していただくと、やはり座っていてきちんとしているクラスが安心みたいところがあるので、どういう子どもを育てたいのか、どういう姿を目指していくのかっていうのを、少なくとも学校全体で、できれば地域とか保護者とも共有していかないと、心ある教員もたくさんいると思うのですが、思ったことができない現状があると思うので、そこに教育委員会や指導主事が入っていったのが、すごく大事なことなのかと思いました。

○秋田 ありがとうございます。田村先生、いろんなご経験がおありと思うのですが、いかがでしょうか。

○田村 そもそも子どもとはどういうものかとか、あるいは学びとはどういうことなのかとか、あるいは教育とか保育っていうのはどういうことかみたいな話を、子どもを中心にしようってことは、180度ぐらい価値観がひっくり返る話なわけです。恐らく幼児教育の関係者の中でも、そう簡単にいかないことがあるし、その突破口役だった中山先生のお仕事に関しては、常にストレスがたまってたんじゃないかなと伺っておりました。

幼児教育で育ってきた子どもたちの良さを、われわれがうまく引き受けて小学校で実現していくのですけれども、それは学校生活における子どもたちの動きのメリハリみたいなものを、十分理解することが大事なんじゃないかなと思いました。つまり、朝から晩まできちんとしているわけにはいかないし、かと言って、朝から晩まで、ずっと自分の勝手気ままにもいかないと思うんです。子どもは発達するわけですから、そういったことを幼児期の皆さんとも小学校の皆さんとも、お互いに確認しながら進めていかなくてはいけない局面にいるのではないかなと考えながら、お話を聞いていました。

その大切な場面として、さっき松村さんがおっしゃってくれたような、話し合いとか語り合いとか、共有の場みたいなものが効いてくるのかなと思いました。

○秋田 ありがとうございます。私も伺いながら、両方の立場が分かるし、幼児教育が逆にあまりにも小学校的に準備が過ぎているのを見せていただくと、そこにも不自然さを、私は感じています。子どもが言われたときに素直になるだけではなくて、本当に好きなことを夢中になってやっているときは、子どもはうるさくない。先ほどの黒板係の話もそう

ですけど、必然的に何かを理解すれば、幼児も児童も、そこでいろいろなことを自分で判断できることの共有がとても大事なんだろうと思います。けれども、園側も小学校の側でも、その辺の学びの転換とか、子どもを信頼する在り方の共有を園と学校で、さらに園間で持つことが難しいところに、この保幼小接続連携の難しさはあるのだろうと伺っていて思いました。

中山先生が、7年やっても深まったっていうよりは始まったばかりの感覚がするというのは、すぐ変わったとか、良くなったっていう感じはなかなかしないけれども、続けていくから関係づくりができていくというところが、校種間連携はどこもそうだと思うのですが、あるのかなと思いました。

そして、先ほど田村先生が言われた、やはり遊んでばかりも小学校ではいけないし、しかしそのメリハリが大事なのだと思います。ある自治体で園児が小学校を見に行くときに、ある園の知恵で授業全体を見に行ったりしないで、6年生の授業の終わりを廊下で子どもたちが見る。チャイムが鳴った途端に動きが変わる。そこまで学校ってこんなに真面目に授業を聞いているんだって園児が見る。でもそれだけではなくて休み時間になった途端に、子どもたちがほっとしている場面と両方を見る。それから、子どもにとって、園児が一番不安なのはトイレだったりするので、小学校のトイレってこうだよと見せるようにしているというお話をある自治体の事例としてお話を伺いました。そのときに、これまでどちらかという、きちっとしなければいけないと考え、そういう姿を、園児も小学校に見に行ったり、求めていることが多いのだけれども、もう少しその辺りも工夫が大事なのかなと思ったところです。

あと、もう1点先生方にも伺ってみたいと思ったのは、中山先生から提案というか、課題として出された点です。担当者が変わったときに、どうやってうまく続いていくのか。

1つはカリキュラムをつくるというところだと思うのですが、その辺りは担当者、担任が変わっても続いていく知恵みたいところを、ぜひ松村先生、田村先生からも伺えるといいなと思っているのですけれども、どうでしょうか。

○松村 本校もそこは課題で、やはり1年担任任せになっていると、1年担任は、毎年基本的には変わるわけなので、そこでの引き継ぎはなかなか難しいなと私も感じていたので、1つはカリキュラムを残すということと、もう1つは組織を工夫しまして、校務分掌の中に保幼小連携教育を担当する部門みたいなのをつくって、その校務分掌で引き継いでいく形に、今はしています。なので、園との連絡調整みたいところは、1年担任がやる



のではなくて、その校務分掌の組織がやっけていて、いろんな資料も残していくと。そうすると教育計画にも残っていくので、ある程度、1年担任とか管理職が変わっても、取り組みは継続していけるのかなというふうには考えています。

○田村 今の話を聞いていて、やはり大きくは人の問題とシステムの問題があるんだろうなと思いました。また後で、たぶん話が出てくると思うのですが、松村さんのように、まだ若い人で、子どもを中心に教育ができるという人もいらっしゃる、なかなかそうでない方もいらっしゃるということですよね。ですから、そういった教員の意識転換がうまく図れば良いと思うのですが、それが行われたとしても、「松村さんがいなくなっちゃったら、全部元に戻った」みたいな話が起きてしまうと困る。そうになると、いかにそこにシステム、体制、組織を用意しておくかということになると思うんです。学校としては、松村さんがお話ししてくださったようなものが考えられると同時に、やはり自治体として、教育委員会としてどんなものを用意しておくかということは重要なポイントになってくるでしょう。そのためには先ほどから話題になっている、教育課程、カリキュラムの話や、教員研修の話や、それらを支える、全体としての教育委員会のサポートシステムが用意されるとよいのではないかなと思うところです。

そういったものを準備しながらも、学校の文化や風土の中に、やはり新入生、新1年生が学校の主人公であるというような文化が生まれてくるのが大事なんじゃないかと考えます。つまり4月の入学式っていうのは、学校の全職員や学校の全ての子どもたちが、新しい1年生をお迎えする、まさにその主人公が入ってきたと考えるようにしたい。新1年生の彼らを中心に、ある意味4月から学校が動き出すという文化ができてくると、おのずとそこに暮らしている教員にも子どもにもそういう意識が醸成されるでしょうし、校内にもそういう風が流れてきて、そんな空気が全体を占めていくことができていることを期待したいと思います。

そうした考えの基本にあるところは、やはり幼児教育、幼児期の教育に学ぶということがベースじゃないかなと思います。

○秋田 すてきですね。小学校1年生が主人公になれる学校って、本当にすてきな言葉だなんて今伺っていても思いました。また松村先生が言われる組織をつくることは大事だなと思います。

後でまた話も出てくるのかなと思いながら、逆に幼稚園の先生、私に関わらせてもらっている静岡市では、新任の教員研修の一つに、今年、コロナになってからですけど、小学

校の授業をスマホで撮って配信し、60人ぐらいの新規採用の保育者が全員1年生の授業をオンラインで指導主事が撮ってくれて、それを見る試みが研修に入っているんです。そうすると、小学校1年生は、かっちり何か指導されているというだけではなくて、生き生きと生活科の場面などで、こういうこともあるんだとかの気づきがあります。また、そのつながりは逆に今度は指導主事の方が、もともと小学校籍の方が幼児教育担当の指導主事になれる場合多いので、解説を付けてくださったりしています。授業を大勢で見に行くと大変なんですけど、オンラインのスマホ1台ですので授業の邪魔にもなりません。後で園の先生たちは全員で、新任の先生たちの採用研の一つにそういう内容が入っているのですが、オンライン参観を通して小学校ってこういう形でやっている授業もあるんだなって、園の先生方もわかります。だから生き生きとやっていけばいいんだなみたいなことを分かってくくださることも生まれています。

今のような話を聞いて、中山先生いかがでしょうか。

○中山 ありがとうございます。田村先生おっしゃるような風土というか、文化を醸成することも、これはちょっと時間はかかるかと思いますが、すごく大事だと思いますし、一方で、松村先生おっしゃったような、そういう校務分掌とか、そういう組織として関わっていることによって、それが持続していくというのは、なるほど、そうだなというふうに思いました。

オンラインで保育を見ていただくのもそうですけれども、われわれが授業を見るときにも、そういう解説があると非常に理解が進むので、ある意味では大人にとっての教材ですけども、そういったものも開発する意義っていうのは非常にあるななんていうふうに思いました。

本当にちょっとした子どもの見方とか、発達の見方をやりとりするだけで、子どもにとっても、それからそのことによって先生にとってのプレッシャーもなく、親もそれで喜ぶような、そういうことがきつとできるんだろうなと思いますので、課題は山積なのですが、非常に取り組みがいがあるものだというふうに思っていますので、今後ともご指導よろしくお願いたします。

○秋田 ありがとうございます。

○田村 ちょっと中山先生にお聞きしたいのですが、私の発言も、松村さんの発言も、やや小学校寄りになる傾向が出ているところがあると思うんです。それに対して、中山先生のお立場から見たときに、小学校のほうって、もうちょっと変わるといいんじゃないのと

お感じになるようなことがないでしょうか。

○中山 別に嫌なこととか敵対することではないのですが、最初に取り組みを始めた赤見小学校の校長先生が、1年終わったときに「簡単には動かないよ」と。何がって言ったら「教育委員会もさることながら、校長会ってというのがあって、なかなか変わらないよ」っておっしゃったのが、今も頭に残っていて、子どもの見方とか、お二人の先生おっしゃいましたけど、どういう子どもを育てたいのかっていうところが、やはり共有されないといけないので、意識ってというのはなかなか変えるのが難しいと思うところはあります。

○秋田 よろしいですかね。また続いてぜひ、お互いにそこら辺が語り合えるといいかなと思っています。

時間の関係もあって、それでは続いて松村先生のほうからお願いします。今度は小学校側からということで、小学校の体制や自治体の取り組みについて、松村先生のほうからお願いします。

#### 4. 【テーマ2】園の活動から小学校への学校体制や自治体の取り組み

提案者〈松村英治先生〉

大田区での幼小連携の組織体制や研修制度、小学校低学年、生活科との連続性

[参考資料：20220130\_jfecr\_th2\_matsumura.pdf]

○松村 それでは、大田区や本校の取り組みですとか、それから私がやってきたこと、考えてきたことについて15分ぐらいでお話しさせていただきます。

まず大田区の現状としては、結構、先ほどの中山先生のお話に近いのかなと思ったのですが、認定こども園と区立の幼稚園はゼロです。10年前ぐらいに区立の幼稚園をなくしていったようです。

民間の幼稚園はたくさんあって、その中でも預かり保育はほとんどやっているの、保育園化している感じなのかなというふうには見えています。区立の保育所は割とありまして、それから民間の保育所、いろんな規模がありますけれども、たくさんあります。区立の小学校は59です。

大田区には保幼小地域連携協議会というのがあり、これは小学校の地域のブロック別に設置をしているものです。例えば本校が所属している久原ブロックというのは、そこに小学校7と幼稚園が9と保育園34が、地域で割り振られています。

実際何をやっているのかというと、実はちょっとこれが残念な状況で、年に1回実施。それも、その中身は就学時の情報の引き継ぎの場を設けているという感じで、実際に相互に研修をするというようなものではなくて、円滑に情報を引き継ぐための場をつくっているだけになっています。

次に、大田区幼児教育センターというのがあり、各種研修の企画運営ですとか、情報誌が年1～2回送られてきたり、それから小学校1年生のクラスに、これ本校もそうになっているのですが、週1回、この幼児教育の担当が来てくれて、授業の支援や調査の研究をしていると。

この幼児教育センターの指導主事は、指導課に所属している小中学校籍の指導主事が兼務をしていますが、東京都の指導主事っていうのは、教科とか専門で採っているわけではないので、生活科や総合的な学習の時間が専門の指導主事が必ずしも幼児教育を担当するというのではなく、いろんな教科の指導主事が持ち回りでやっているような感じだと思います。

この幼児教育の担当7名の中で、保育士1っていうのが、たぶん大事で、この方が実際に保育の内容を非常に理解しているベテランの方が配置をされていて、この人が週に1回本校にも来て、小学校の状況を確認してくださっています。

保幼小連携・接続に関する研修会は、今は3月末のスタートカリキュラム研修会1回だけになっています。このときには、小学校側では、校内の人事がほぼ決まっていて、次年度の1年生の担任を対象とした研修になっています。それからスタートカリキュラムは、令和2年度から教育課程とともに提出が必須になっています。

コロナの前までは、もうちょっと充実した感じだったんです。夏休みにスタートカリキュラムの振り返りの研修会が行われていたり、それから保幼小の合同の研修会もあったりしたので、ここでいろんな保育者の方と関わる機会がありました。それからブロックごとに生活規範意識向上講座っていうのがあって、規範意識の向上について、幼稚園と保育園と小学校で意見を交わし合う機会もあったのですが、こういったものはコロナで、ちょっと優先順位が低いのか、今はなくなっています。

本校の現状は、先ほどお話ししたように、全学年4学級で、割と大規模な学校です。毎年およそ120人入学で、学年全体で50ぐらいの園から来ているので、一クラス当たり、自分が経験した感じだと20園ぐらい。約30人学級で20園なので、一人ぼっちで入ってくる子がほとんどです。なので子どもにとって、それから保護者にとっても、友達づく

りというのが非常に大きな課題で、本校の場合だと学力というよりも、この友達づくりが重要となります。

保幼小連携を推進する校務分掌を設定することについては先ほども触れた話で、教科部会の中に生活・総合・保幼小連携というのを入れています。ここがスタートカリキュラムと交流活動を担当していて、マニュアルや実施案、様式を管理していて、次年度に引き継ぐ体制をつくっています。

本校のスタートカリキュラムは、国研から「スタートカリキュラム スタートブック」が出た平成27年度、このタイミングで編成・実施して、毎年毎年改善を重ねています。具体的には、いろいろな単元がどういうふうに関連付いているのかを示した単元配列表と、週の予定を示した週案です。

友達づくりがどうしても課題なので、そこに少し重点化したようなカリキュラムになっていたり、学校探検をしながら、生活科と国語を合科していく。それから教科の指導も、全部座って話を聞くのではなくて、少し遊びのようなところから入って行って、気付いたら文字とか数を勉強しているみたいなどころに入れるようには工夫をしています。

教室内で思い切り遊ぶということがコロナでこういうことができないのが、かなりきついなと思っているんですが、コロナ前は本当に教室を広く使って、体を動かしながら、こんなふうに子どもたちが朝は遊びを通して関わっていく。学校探検は、先生がずらずらと引き連れていくのではなくて、自分の行きたいところに行って、時間になったら戻ってきて、気付いたことを交流すると。

やはりこういうことができるためには、学校全体の理解っていうのが必須で、1年生がばらばらと歩いているのが当たり前前の学校にしたいなと思っていたので、地道に続けて6～7年たつと、4月の学校というのは1年生が自由に探検をしているもんだろうと教員の中で当たり前になっていく。先ほど田村先生から文化っていう話もあったのですが、そういうのが少し定着してきたかなと思っています。

探検すると、いろいろな発見があつて何かかきたいとかっていう話になってくるので、絵に表したりとか、50音表をラミネートしたものをクラスに何枚も置いてあるので、文字を覚えている子もいるし、全然覚えてない子もいますので、でも書きたいっていう気持ちは割とみんなあつて、この50音表を手掛かりに、一生懸命文字に表すと。

それから教科の学習も、全部前を向いて先生の話聞くのではなくて、ペアとかグループの活動を入れて、友達とつながり合いながら、いろんな学習の中で友達づくりというこ

とを意識して指導をしています。

このようなことを学校全体で共通理解をし、学校体制で進めていくために、入学式までの職員会議でミニ研修を必ず位置付けてもらうように、教務と調整をしています。これによって、異動してきた教員とか、新任で着任した教員も、スタートカリキュラムの組み方を知って、1年生を迎える体制をきちんと整えるということです。内容としては、学習指導要領上、きちんと位置付けられているんだという話から始まって、こういう姿を目指していく。単元配列表と週案っていうものがあるんだ。それから一日のイメージとか、「ゼロからのスタートじゃない」ので、赤ちゃん扱いみたいなことはやめましょうということを共通理解できるようにしています。

どうしても1年生って、決まりとか仕方とか使い方を教え込まないといけない。先ほどの「黄金の3日間」にかなり似ていると思うのですが、最初に全部教え込まなきゃいけないっていうのが、今までの経験上、そういう思い込みがあるので、そういうことではないんだということと、大人の都合とか、これまでもこういうふうに来てきたから1年生にこうさせるっていうようなルールの設定はやめましょうと。でも、必要なルールは当然あるし、それを理解するのは大事なこともあるので、それはきちんとそのルールの意味を納得したりとか、子どもたちと話し合っただけで決めていく、そういうことを大事にしていきましょうということを確認しています。

そういった話は、実は6年生の児童とも共通理解をしまして、ちょっと今コロナで、まだできていないのですが、6年生が4月の朝に1年生の教室に行って支度を手伝うことがあり、今までは本当に何でもやってあげるのが素晴らしいみたいなことだったのが、1年生って「ゼロからのスタートじゃない」ってことを、6年生とも共通理解をして、やはりできることはきちんと自分でできるようにすると。それでも困っていたら助けるみたいなことを指導しています。

入学式の児童代表の言葉を6年生の代表で担当するのですが、これも以前は何でも教えてあげますみたいな感じだったのを、もうどんどん自分でやってみたいな感じで、言葉の内容を改善しています。実際の1年生との関わり方も見直して、今、右下に出ている写真はどういう状況かというところ、赤色の服を着ている子が1年生の女の子なんですが、名札を付けているんです。それを6年生の男の子が見守っているところを偶然見つけてまして、今までの6年生だったら、たぶん手を出していたと思うのですが、この一生懸命試行錯誤して頑張ろうという1年生を、6年生が手を出さずに見守っている。こういうことが生まれ

るように、大人だけではなくて、6年生の子どもたちとも理念を共通理解しています。

少し話が変わりまして、交流活動についてです。

本校、回数としては少なく、年間に2回、秋と冬に交流活動をしています。改善の方向性としては、回数を増やすよりも中身をよくすることを優先してきまして、今まではどうしても大規模校なので、イベントみたいな感じだったんです。どういうことかということ、体育館に1年生がお店みたいなのを開いて、そこに保育園の子に来てもらって遊んでもらうみたいな感じでした。

それもやらないよりはいいと思うのですが、どうしても保育園の子どもたちがお客さんみたいになってしまうのと、どうしても子ども同士の関わりっていうのは薄れてきてしまうので、これをもっと何とかできないかと考えまして、私が着任してから、近隣の5園に声を掛けまして、1クラスと1～2園でペアを組んで、1年間活動をしていくという形に変えました。

一応、活動の内容としては、秋は秋の遊びみたいなことをしましょう、冬は、少し就学を意識したような活動にしましょうぐらいは全体で共通理解をしておいて、あとは、そのクラスの子どもたちと担任と、保育園や幼稚園側で内容は相談して柔軟に決めていくという形にしました。そうすると子どもたちが、こういうことをしたいっていう思いも反映されやすいと思いましたので、学年一斉で何か活動するということをやめて、小回りが利くような形で実施しています。そうすると関わりも結構密な感じになっていて、子ども同士もペアやトリオを組んでいるのですが、これも秋と冬で共通にしています。

スケジュールとしては、5月にこの関係者がいったん顔を合わせるという会を開いてまして、ここで1年生のスタートカリキュラムの様子とかをお話ししています。ここで顔合わせをして、お互いのことを知ったら、7月ぐらいにペアのクラスとか園を決めまして、夏休みに打ち合わせをしていきます。

このときに、小学校側がなるべく保育園とか幼稚園に伺うようにして、夏休みも結構開いているところは多いので、打ち合わせの前後に保育を見せていただいて、ちょっと解説をしていただくようお願いをしています。

11月頃から第1回の交流活動で、その後1月頃が第2回の交流活動で、最後2月にもう一度全員で顔を合わせて、思ったことを言い合う。これも最初はきれいごとみたいなことが多かったのですが、やはり年々経験を重ねるにつれて、園の先生方から結構率直なご意見を頂くようになりました。「もうそんな形式張ったことはもういいから、もっと自然

に子どもたちを関わらせたい」「2回のつながりをつくるために、同じ歌を歌うようにしよう」「園の先生たちの出番も欲しい」とか、いろんなことを言っていただくようになったので、これも続けるってことが本当に大事なのかなと思っているところです。

最後に、本校の生活科の話です。年間指導計画はもちろんあるんですが、そこに注意書きを入れておまして、「具体的な学習対象とか活動とか単元名は、学年会で相談の上、子どもたちと話し合って決めていく」というようにして、子どもたちの思いや願いに基づく学習活動が展開できるようにしています。

私が生活科の授業づくりでとても反省した出来事があります。それは最後に1年生を担当した平成28年度の夏の遊びの単元で、子どもたちが砂や水を使って遊んでいく活動で、私としては随分ダイナミックにやっていたつもりだったのですが、これを研究授業でやったときに、横浜の寶來生志子先生ってご存じかと思うんですが、講師として来ていただいていた寶來先生から「これはダイナミックでも何でもなし」と。「園の砂遊びのほうが素晴らしくてダイナミックだから、それよりもこじんまりとしてしまっている」みたいなことを協議会でご指摘いただきまして、その夜、随分へこみました。明日どうしようって思って、どうしたかという、もう思い切って子どもたちに聞きました。「本当のところ、園の砂遊びと比べてどうだった？」って。聞いてみたら「前は一日中、やりたいだけやっていた」とか言うんです。

このとき、授業はどうしていたかという、1時間でやっていたわけですが、1時間って45分しかないんで、準備とか片付けの時間を除くと、実際遊んでいたのって20分とか、長くても30分ぐらいだったので、園の頃に比べれば子どもたちは非常に制限された中でやっていた。着替えも持ってきていなかったんで「園のときは着替えていた」とか「全身泥だらけ」「お相撲レベル」って、たぶんほぼ裸みたいな感じでやっていたのかなと想像するのですが、あと道具もすごくて、「でかいスコップとか、でかいバケツとか」。それから「トロッコを使って運んでいた」とか言う子もいて、全然私の知らない世界が広がっていて「家からも持ってきていた」という子もいましたし。

ただ、本校の近隣には小規模の園がたくさんあるのも事実なので「反対だった人はいるの？」っていうふうにも聞いてみました。そうするとやはり、園のときは水を使っていなかったとか、園庭が小さくて砂遊び自体をあまりやったことがないという子もいたので、ちょっと整理してみようかって言って手を挙げさせたところ、30人ぐらいのクラスで、園のときのほうがもっとすごかったっていう子は、実は3分の1ぐらい。あとは、水を使



っていなかったとか、園庭が小さかったとか、砂遊び自体をあまりやったことがないって子たちでした。実際私も子どもの思いや願いを大切にすること、もちろん意識してきたのですが、ここまでの実態を知らずに授業をつくってきたんだということが分かり、とても反省をした次第です。

今後の課題として、今述べたような、やはり園の多様な環境とか状況への理解を、小学校側がして、それに対応して授業をしていくというのは、本当に課題だなと思っています。

2つ目が、コロナ禍において交流活動とかスタートカリキュラムが制限されているところをどうしていくか。

3つ目が、特別な支援を要する児童が年々増えている感じがするのは私だけなのか分かりませんが、本校も教室に入れない子が何人かいて、そこへの対応をどうするか。

4つ目が、指導計画はスタートカリキュラムもそうなのですが、区内で随分そろってきたんですが、それを教室でいかに質高く実現していくかっていうのは、非常に課題です。紙としてのカリキュラムは準備されたとして、それを教室での教育実践として確かに具現化していくという部分です。

最後に保幼小合同の研修会を、もう一度復活させないといけないなと思っています。

これは区全体と本校の共通の課題ですが、校長先生のリーダーシップが必要不可欠なのは、言うまでもないのですが、それ以上に学年主任とか分掌の主任みたいな、ミドルの世代の役割ってというのが非常に重要だなと最近思っておりまして、校長先生が変わっても学校全体の取り組みを続けていくっていうところでは、このミドル世代が重要な役割を果たしていくのではないかと考えています。

以上です。ありがとうございます。

○秋田 どうもありがとうございます。ご自分の担任の経験や主任の経験も踏まえてお話しいただきました。

先生方からコメントを自由に頂けたらと思います。いかがでしょう。

○田村 お話を聞いていて、松村先生ご自身が非常に意識的に取り組みになっていることがよく分かったし、一個一個の積み重ねは、松村先生が提案したり、呼び掛けたりして積み上げてきたものかなって思うんです。

感じたことの一つとしては、いかに安定的な実施を目指そうとするかに気を配っているなど感じました。自分だけじゃなくて、他の先生も、年度が変わっても。そういった意味では、安定性ですね。

それからもう一つは、自分やクラスだけじゃなくて、それを拡大していく。学年の他の先生とか、校内の他の先生とか、学校外ってことですよね。この安定と拡大を意識されているかなと思い聞いていました。こういうことが、中山先生がおっしゃった、継続に結び付いていく、重要な要素なんじゃないかなと思いながら伺っていました。安定的にできて、より拡大しながら連携が進んでくると、そこに生まれたさまざまなネットワークとかシステムが、継続に向かわせていく可能性がある。また後で松村先生から聞きたいと思うのですが、たぶん手順というか、順序性みたいなものがあつたんじゃないかと思うのです。取り組んできた経過が分かると、それは参考になるかなと思いました。また、そういったことを推進していくキーパーソンが、必要になってくると思うんです。それは教育委員会の人になるかもしれないし、学校になるかもしれないけど、それが1人じゃなくて、いっぱいあれば、いろんなどころで動き出す可能性が出ると感じました。このキーパーソンに求められる能力は何なのかと、考えながら聞いていました。そういったものも見えてくると、バリエーションが豊かなものをつくり上げていくときのヒントが見えるかなと思いました。

砂遊びの話で、子どもにちゃんと聞いてみる辺りはすごい、さすがだなと思いました。なかなかできないと思います。自分の取り組みを見つめ直している姿は素晴らしいなと思います。

○秋田 ありがとうございます。ぜひ後で、まとまってお話を頂こうと思います。

では次に中山先生、いかがでしょう。

○中山 ありがとうございます。安定と拡大という田村先生のおっしゃることも非常に確かに、取り組みを続けていくというところで大事なことなんでしょうなというふうに、全体として思うところでありましたし、あと、自分が今後小学校の先生方と話していくときに変えることがあるとしたら、どういう突破口で何を変えていきたいと思いますという具体的な視点が幾つかあつたので、非常に刺激を受けました。

例えば、先生方のミーティングで、当たり前のことですが、目指す児童像、どんな子どもを育てたいのかということ、もちろんそれはゼロからのスタートではないってことでありますし、そういうことを話し合っている。

あとはルールのお考え方ですね。規範意識をどう捉えるか。この辺結構、自分も黒板係のところだと思っていたところなので、それを子どもたちの視点から考えていくってところなんかは、やはりすごく大事だなと思いました。

それとあとは、授業の在り方を見直すところで、先ほど田村先生もおっしゃっていましたが、砂場のところで、子どもたちに聞いてみるっていうのは素晴らしいなど。意見表明というか、子どもたちを主人公っていうか、本当に1人の人として捉えて、ちゃんと聞いてみるっていうのはすごく大切に、単元名ですか。単元の名前も、子どもと決めていくなんていうのは、すごく新鮮で、なかなかそういう発想なかったので、面白いなと思いました。

あとは、6年生と一緒に協力して1年生を受け入れていくなんていうところも、今度ぜひ地元の赤見小学校と「こういう話聞いたんですよ、面白いですね」なんていう形で意見交換してみたいのですが、当然、6年生と関わるってことは、6年生の先生とも関わるわけですから、取り組みが全校で行われることになりまして、子どもを巻き込むっていうことは、本当にこれからの学校教育をさらに良くしていくためには大切なことかなと思いました。

感想ですが、ありがとうございます。

○秋田 ありがとうございます。私も大変興味深くうかがいました。研究授業で厳しく言われて、そこでへこむだけではなくて、そこから考えていく姿、それから実際にやはり保幼小のリアルに迫ってらっしゃるなどと思ったんです。

昔の研究開発学校の事例では、一公立幼稚園と一小学校の連携だったり、国立大学附属校園で特定のところが中心に、どうつなぐかという話が主だったと思うのですが、今、先ほどのお話の50園ではありませんが、やはり多様な園からの子どもがいて、多様な経験をしてきています。小学校全体もそうだと思うんですけど、そういう中で、じゃあどういうふうにしたらいいのかっていうようなところを、具体的に示してくださっていて興味深くきかせていただきました。たぶん今回の架け橋プログラムでも今後考えなければいけないのは、そういう多様な園から、いろんな子どもが多様な経験を持って小学校に来たとき、先ほどのアンケートでもそうですけれども、どう子どもの園の経験を生かしつつ、でも多様な子がいるわけだから、どういう配慮をしたらいいのかを、小学校の先生方も理解してくださることだと思います。またそれから園側も、こんなに園間で違うんだということをお互いに理解することが、園の側にとっても振り返りの機会になると思います。こうして松村先生のお話を聞いて、水の経験がないのはやむを得ないと思うんですけども、でもちょっとでも水場があるところに子どもたちを連れていこうとか、いろいろな工夫の取り組みができるような気がします。

逆に、多様な園が小学校に上がるからこそ、小学校がそうやってくれれば、園も学ぶことができるなとも思いました。それから、6年生と1年生のも、さすがと思ったのは、あれを言葉で言っただけでは、現場の先生は伝わらないんですけども、あの写真1枚を見ることによって、ああ、子どもがやっている試行錯誤が大事ってことを、園の先生も小学校の先生も共通に思っているんだと思うんですけど、どういうところで見守ったらいいいのかみたいなところの瞬間を出してくださることが、やはり大事だなと思います。

5年生と年長が交流しておく、1年と6年になっていいですよなんていう話はするのです。ですが、そのときの6年生の関わり方を全体で見るということは、低学年からの関わり方とか、人の関わり方の尊厳を6年生に教えることになりますね。教え込んじゃうんじゃなくて、ヒントを与えたり、分からない子も支えていく、そういう在り方も6年生が学んでいくいい機会にもなっているのかなと思った次第です。

1点伺いたかったのは、どうやって松村先生とか交流の先生は、園の先生と、どういう対話をしよううまくつないでいくことを考えられているのかっていうところです。研究会など持たれたときの、園との中で、小学校の先生側から見たときに、園が多様だからこそ、こんなところを意識して対話しているよとか、園側へのリクエストも聞かせてもらえるといいなと思います。

以上、教えてもらえますか。

○松村 まず秋田先生からのご質問ですが、小学校の教員が園の先生方と話す、「もっとこういうふうにしてほしい」みたいなのが、中山先生は逆だったかもしれないのですが、われわれからすると、やはり「もうちょっと座れるようにしてほしい」「字を読めるようにはしてほしい」とか、小学校側の都合を優先した要望がどうしても先に出てくると思うのですが、それをやめて、園と小学校には上下がないんだっていうことを、特に1年の担任の中できちんと理解をするようにして、園の先生から学ぶっていうことを大切にできています。

その園でどういうふうに行っているとか、今、こんなふうな活動をしているんだっていう話を、たくさん聞かせていただけるので、園ってそういうふうな指導の仕方をしているんだとか、なんかそれって生活科と似ているとか、参考にして指導の仕方を変えてみようとか、学ぶことってたくさんあると思うので、それは保育を見に行かせていただいたときもそうなのですが、お互いに専門性が違うことを、違いは難しいのですが、違うことを尊重し合うというか、面白いなみたいなことを基本にするのが大事かなと思います。

○秋田 ありがとうございます。

あと、お二人の先生方のご発言へのコメントもあればお願いします。

○松村 手順とか、推進する人っていうことなのですが、これ、結構難しいなと思って、自分がどうしてきたのかなっていうことを振り返ったときに、安定っていうことを考えると、紙で残すとか、仕組みをつくるみたいなことはすごく大事だと思うんですけど、やはりそれだけでは中身が伴わないところがあって、週案に書かれていることはこなしているんだけど、結局子どもに指示をしてやらせているだけだったりっていうことになってくるので、自分が高学年の担任になってからは、専科で空きの時間も多いので、特に4月は、1年生の教室をよく回るようにしていました。スタートカリキュラムの実施状況みたいなものを、実際に教室に行ってみせていただいて、あれこれ指導するわけじゃないのですが、大体教室に入ると放課後に、その先生が「どうでした？」みたいなことを聞きに来てくださるので、こういうのがすごく良かったですよとか、もうちょっとこういうふうにすると、より子どもが動きやすくなると思うとか、やはり生の姿を見て、指導に生かせるようにする。形を整えるという話と中身を充実させていくことを、両面から攻めることと、ちょっとでも興味を持ってくれた人を巻き込んでいく。

今、本校がありがたいのはスタートカリキュラムとか、生活・総合が専門じゃなくても理解をしてくれる教員はすごくたくさんいるので、そういう教員を増やすためには、一朝一夕ではできなくて、少しずつ少しずつ仲間をつくっていくことが大事だったかなというふうに思います。

○秋田 よろしいでしょうか。ありがとうございます。

そうしましたら、ちょっと今、予定より押しているのですが、ここで10分間、まず休憩を取らせていただきまして、その後、今度は少しマクロな視点から、田村先生にお話を頂きたいと思います。その後、全体討議と総括を併せてやっていく形で予定どおりになるかなと思いますので、今から10分間休憩をさせていただきたいと思います。よろしくお願いたします。

<休憩>

○秋田 ありがとうございます。それでは再開させていただきたいと思います。それでは田村先生のほうから、今度は自治体や国のこともたいへん詳しくていらっしゃるの、

それらを踏まえてお話をいただけたらと思います。どうぞよろしく願いいたします。

## 5. 【テーマ3】自治体や国の架け橋プログラムとこれから 提案者<田村学先生>

スタートカリキュラムの実現のための国や自治体の仕組みと管理職や指導主事の在り方

[参考資料：20220130\_jfecr\_th3\_tamura.pdf]

### ○田村

先ほどの松村先生の「紙も大事なんだけど、そこに魂を込めなきゃダメなんだ」というお話、中山先生から「エピソードからカリキュラムを開発してきた」というお話を聞きながら聞いていました。今回の学習指導要領や幼稚園教育要領といった教育課程の基準の改訂は、学習する子どもの視点に立つという大きな理念があって、実際の社会で、本当に子どもたちが自らの人生や、あるいは社会で活躍できる資質・能力を育成すると考えるならば、幼保小の連携接続だけの話ではなくて、むしろ全ての園、小学校、中学校、高等学校に結び付くのではないかなと考えながら聞いていました。

この幼保小の連携接続の話は、日本の教育全体を大きく転換していくようなものではないかなと、あらためて考えました。

その意味では、基本は、幼児期の教育に学ぶということをベースにしながら、話を進めさせていただきます。画面の共有をします。

今回の改訂はご存じのとおり、何ができるようになるか、何を学ぶか、どのように学ぶか。この、どのように学ぶかに大きく光が当たってきました。この大きな資質・能力の3つが小学校以降はこのような形で示され、幼児期においては、この下のベン図のような形で示されています。若干の違いはあるものの、基本的にはこの両者は貫く形で整理がされましたので、幼児期、そして小学校、中学校、高等学校がきれいにつながったというのが、大変大きな特徴で、言ってみれば、それが当時の下村大臣が明治維新以来とおっしゃったような大改革ということになるかもしれません。

幼児期の学びを小学校にもつないでいこうとしています。生活科というのは、まさにその理念で誕生したわけですが、それを中学年、あるいは中学校、そして高等学校も変えていこうということで、全国的にはそんな動きも出始めているということだと思いますし、成果は出ていると考えていいのではないのかと思います。この貫くものの一つの象徴的な例が、この10の姿ということになってくるかと思います。

この10の姿については、明確に幼稚園教育要領に出されているわけですが、案外と小学校の先生方は、この辺に対する理解や認識が十分でないということも、大きな課題ではないかなと思います。どちらかというと、幼児教育関係者が使う言語ということなのかもしれないです。それぞれについては、非常にハイレベルなことが書かれているところではありますけれども、到達すべきものではないかもしれませんし、それぞれに書かれている要素を、全て同時期に身に付けなきゃいけないわけではないかもしれません。逆に言えば子どもたちは、状況が整えば、十分にそんな力を発揮してきたということだと思います。

基本的には、この幼児期の教育に学ぶということが重要だと思いますので、この10の姿といったものを、今後どのように上に結び付けていくかが一つのポイントではないかと感じると思います。

そんな中で、小学校以降の先生方が比較的重要にされているキーワードは、この「主体的・対話的で深い学び」という言葉になるかと思いますが、この「主体的・対話的で深い学び」というのは、幼児期の子どもたちが自ら、あるいは他者と共に学んでいく姿、遊びの中にこそ現れていて、このような幼児期の能動的な学びがモデルになるってということだと思います。これは見方を変えれば、プロセスをいかに充実させるかということと捉えると分かりやすいのではないかと。まさに幼児期の子どもたちは、遊びといった、そのプロセスが充実する中で力をつけていくわけでしょうし、それが小学校以降は教科といった、教科の学びといったものが見えてくるということかだと思います。ですから、こんな低学年の子どもたちの活動や体験を、学びのほうにシフトしていくところに、生活科といった教科があるのかもしれないです。

小学校に入ってくると、一人一人を大事にしながらも、他者との協働性がよりダイナミックになり、言葉も、自由に使えるようになってくる。こういったことを、意図的に、なめらかに、制度的に整備したいということで、このスタートカリキュラムというものが小学校以降入ってきたこととなります。この辺のところの確認をしていきたいと思います。

3つぐらいステージに分けながら、スタートカリキュラムの導入経緯を見ていくとするならば、学習指導要領のレベルで言いますと、平成20年の改訂のときに、解説に初めてこの言葉が入りました。これは小1プロブレムといった、小1の子どもたちの学校生活への適応の目的が強かったと思います。学習指導要領解説に2カ所、スタートカリキュラムといった言葉が入ったのです。次のステージとしては、このスタートカリキュラムに関す

る資料が、松村先生などのご協力をいただきながら、もう少しグレードアップしていこうということで作成してきた時期になります。つまり、学校生活の適応だけではないという話です。その中で大事にしてきたことが、学校は、子どもたちが安心して安全な生活ができるような場にしていこうということです。平成27年につくり、全国の幼児教育の関係者や、小学校の低学年の皆さんにお届けをし、スタートカリキュラムを随分と明確に、皆さんにも認識していただいていたと思います。

ここでは、入学直後の子どもたちの学びの様相を幼児期の子どもたちの学びから連続・発展するような形にしなが、学習環境を見つめ直し展開していこう。そこには時間、空間、人の問題もあるということだったのではないかと思います。

そんな流れが、現在の3rdステージということで、学習指導要領の改訂に位置付くかと思ひます。何が明らかに違うかという、学習指導要領上に、明確にスタートカリキュラムのことが明示されたということになるかと思ひます。と同時に、それが低学年のみならず、全体のカリキュラム・マネジメントとも連動しているということも、大きなポイントになるかと思ひます。

学習指導要領、教育課程の基準の改訂で言うならば、幼稚園教育要領にも小学校との接続が示され、小学校のほうでは、まさに幼児期とのつながりといったものが総則にも書かれ、生活科にも示されたということです。

ちなみに、これが小学校の学習指導要領、総則第2の4の(1)ですが、学校段階間の接続と書かれていて、特徴的なところを見ると、まず出だしに、幼児期の終わりまでに育ててほしい10の姿を明示した上で、児童が主体的に自己を発揮しながら学ぶということを目指しました。2段落目の「また」ですが、低学年における教育全体において、これまで学習指導要領上、低学年における教育という言葉はなかったのですが、初めてこういう言葉が出てきて、1年生、2年生にフォーカスしたものが、初めて出たこととなります。例えばということで、生活科を中心に考えながらということが明確に明示され、合科関連といった指導や、弾力的な時間割の設定ということが明確に明示されたということになります。これを受ける形で、生活科のほうでも、学習指導要領の3の1の(4)というところに、他教科との合科関連といったことについての、より一層の推進が書かれています。(4)のところの4行目ぐらいから、「特に」と書かれていて、明確にそのスタート期のカリキュラムといったものを意図的に形成していこうとしています。また、全国的に推進をしていこうということになるかと思ひます。当初の小1プロブレム対応から、学



校生活への適応、学校での安心・安全、今の段階では、これが学びにもうまく連動するよ  
うにということで、入学直後の子どもたちの学習の様子が少しずつ変えられないかと取り  
組んできたわけです。

例えば、これは算数の授業ですけれども、活動性を入れながら、数といったものを明確  
に自覚していこうという教科の学習があったり、生活科の学習の中では積極的に自分の思  
いや願いを実現していくということをさらに推進していったりします。幼児期の子どもた  
ちが小学校に入って、中心にある生活科と、各教科を横断的に接続していくことによって、  
これまでとは違う学びが生まれてくることができるのではないかとということでもあるかと  
思います。

ここで推進するためのポイントを簡単にご紹介します。基本的には、お互いの情報交換  
や相互理解を基盤としながらも、交流活動、連携研修、カリキュラム接続、地域というこ  
とで見ていきたいと思います。

子どもの交流活動については、幼児期の子どもたちにしてみると、小学校の子どもとい  
うのは憧れの存在ですから、とって相性がいいと思います。これまでは、交流活動とい  
うものが、行事とか給食に限定されていたものが、これからは教科での交流といったこと  
を増やしていく。あるいはこういったものが推進されることは重要ではないかなと思って  
います。

教員の連携ですけれども、こちらの園の場合は併設されていますので、学校長は両方の  
園長も兼ねているということです。校内の研修に、小学校の先生が園の子どもたちの様子  
を見に行く、あるいは、小学校の授業を園の先生方が見に来て参加をする。それらを基に  
意見交換することで、お互いに気付けていなかったものが見えてくる、こんなことも可能  
であると思いました。

観察から参画、開発の感じで、少しずつステージが上がっていくことによって、全体の  
カリキュラムは連携接続の質が上がる可能性があるかなと思います。

さらに相互接続の話です。高松の学校ですが、入学以降のカリキュラムをⅠ期、Ⅱ期、  
Ⅲ期、Ⅳ期と分け、幼児期の子どもたちの学びを参考にしながら、小学校1年生カリキュ  
ラムをつくっているわけです。

幼稚園でのアプローチと小学校でのスタートは、こんなふうに関連しているんだと見通  
し、小学校以降のスタートカリキュラムでは、意図的にⅠ期、Ⅱ期、Ⅲ期、Ⅳ期と行くに  
したがって、合科的なものが関連的になり、だんだん教科に分化していくというようなこ

とを、年間かけて整備しています。より質が上がってくるのではないかとことです。

最後に、連携の地域全体の話ですが、個別の学校や単独の先生が行うということではなくて、いかに広げていくかということが、今後ポイントになってくるかと思います。これは高知市の取り組みだと思いますが、非常に積極的にやっていたらいいわけですが、お互いに顔を合わせて、お互いに子どものことを語り合うような場面が出てくるのが、先ほどの松村先生のお話につながるかと思います。

架け橋プログラムは、局所的な学校で行われていた、局所的な地域、自治体で行われていたことを、もっと全国的に広げていこうというアクションになるかと思います。そうしますと、小学校関係者のプレイヤーを引っ張り出さなきゃいけないんじゃないかなと感じております。そのためには、組織をどんなふうにつくっていくか、どんなプログラムとしてのカリキュラムイメージをつくっていくかは、今後問われてくるのではないかなと思っています。

○秋田 ありがとうございます。大變的確に、今までの全体の動きを包括的に見ていただきつつ、今後の課題とすべきこと、まとめをいただきました。それでは、田村先生のお話を伺ってということで、まず中山先生のほうから、幼児期の園の立場から見て、全体のお話を園のコメントや質問などお願いします。

○中山 ありがとうございます。思ったこと、感想なんですけど、以前、別な機会で、確か田村先生からお聞きした記憶があるんですけど、やはり0から18歳までの教育全体のイノベーションを考えていくと。その出発点として、幼児教育と小学校教育の接続ということが取り上げられているのが素晴らしいんだってということを、確かお聞きした記憶がありまして、本当にそうだなっていうふうに、すごく私自身感動したんです。今日もまた同じ感動を覚えておりまして、そんなことが本当に実現できたら、すごく自分としても関わっていることがうれしいです。

ただ、自分はそう思えるのですが、小学校以降の先生方、あるいは、保護者とか親たち、さらに市民の人たちも、どうやったらそういうふうに変えていきたいよねって思えるんだろうかというところが、非常に自分としてはテーマになっています。

私は本当にすごいチャンスが来ていると。学校教育全体を幼児教育起点に考え直している、いきたいってところなんですけども、どうしたら大人たちの中で、そういう内的な動機づけっていうか、本当に変えたいよねって思えるかなというところで、ぜひお考

えをお聞きしたいので、よろしくをお願いします。

○秋田 ありがとうございます。それでは後ほど、その辺りをとということで、松村先生、いかがでしょうか。

○松村 今の中山先生の話につなげてなのですが、頭の中でまず変えてから指導に生かすって順番って、結構難しいのかなと、本校の同僚の先生方の姿を見て思っています。つまり幼児期の教育は大事なんだって思ってから指導を変えるとか、子どもって有能な存在だって思ってから変えるっていうよりも、とにかくカリキュラムはこのようになっているのだから、一緒にやってみませんかかって言って、とにかく一緒にやってみる。そうすると、子どもの姿が明らかに変わるわけですね。今まで、1年生って、落ち着いていて、静かにさせてというのがいいって思っていた先生が、特にベテランの先生ですけれども、実際スタートカリキュラムをやってみると、あ、子どもってこんなにできるんだとか、こんなに生き生きするんだとか、楽しそうにするんだっていうことに、やってみて初めて気が付く。その先生は、今も、そのような指導を継続されていて、スタートカリキュラムをきっかけに変わられたのですが、だから、やはりやってみて子どもの姿を見ないと、変わるのって難しいのかなというふうには思いました。

もう1つ、田村先生のお話を伺っていて、ポイントで4つ整理していただいたのですが、交流と連携まではどの学校でもいけるかなと思ったのですが、開発とかカリキュラムの接続という話になってくると、本校みたいにたくさんの園から来るような小学校は、どういう在り方を考えていけばいいのか。そうすると、自治体レベルでカリキュラムを考えていかないと、各学校が考えても、あんまり意味がないような感じにはなるのかなと思ったので、その辺りが結構、園と学校で1対1でつながれるような地域とそうではないところで、在り方は随分違うなというふうに思いました。以上です。

○秋田 ありがとうございます。まさに本当に地域によって、かなりこの校と園の関係に違いがあるので、その辺りをどう考えていくのかだなど、私もお話を伺いながら思っていました。田村先生が広い展望で、やはり0歳から18歳までと言われているのですが、その出発点に低学年教育のところに、光が当たることが大事と思っています。これは幼児教育推進体制となっているので、どうしても園側の話ですよなと思われがちです。園側の話でもあるんだけど、幼小中高の全体を貫くいいチャンスなのではないかと、私自身は思っているところです。コロナ禍で私はいろんなところでオンラインでつながっている園と小学校、同じ併設園だけでも、その中でZoomでお互いに密にならないように、

園は園、各高中低学年がつながって、みんなで研修やっている研修に参加させていただいたりもしています。それから学校間も各部屋から移動の時間なくつながっていきたり、いろいろ新たな方法が生まれたりしています。少子化だからこそ、その少ない子どもたちをどうやって一貫して、質の高い教育を行っていくのかというところでの議論も、過疎の地域も、人口が増加している集中地域でも大事になってきています。それから小学校でも保護者対応が大変になっているので、多様な子どもで大きくなっていければいいほど、園のときどうしていたんですかっていうことがあります。保護者との関係をつくっていくのにも、園がたぶん大きく貢献ができたりする部分だと思います。園のほうは、今預かりとか長時間保育になって、ご家庭の情報を非常にきめ細かく持っているからこそ、次の子どもたちとの関係を小学校の先生にもうまくつなげるのかなと思って、お話を聞いていました。

その中で田村先生に今日1例を出していただいたんですが、今後の架け橋のところでは、いわゆるアプローチカリキュラムとスタートカリキュラムだけではなくて、2年間を全体として考えましょうっていう話になっているわけですね。さっきの高松の例などは、なるほどって思ったんです。その辺りスタートカリキュラムを、今度は1年生全体に、その架け橋期として考えていくときに、どういうところがポイントになっていくのかというところを伺いたいと思います。幼児から学ぶというときに、小学校側と一緒に一番学べて、お互いになんかいいなって思えるのは、小学校から見るとどこなのかなみたいなのところも考えたいところです。全体を通したときに、低学年教育のためにはどういうことがうまくつながったらいいのかなというところも伺ってみたいところです。

なかなか現実としては難しいところですけども、幼児教育の無償化が始まったことによって、幼稚園も保育所もこども園も全部が幼児教育なんだというのが意識は一体感が持ってきています。そういう意味でも、チャンスはもう今しかないのではないかと私自身は思っているのです。まさに田村先生が言われるように、もっとプレイヤーを小学校側もいろいろ加わっていただいて、今後考えていける一つのチャンスかなと思っています。

私からは雑駁なお話をしましたけれども、ぜひ何か3人の意見を聞いてっていうことで、田村先生からまずお話を頂き、それを受けながら、今日全体のところの自由ディスカッションへと進みたいと思います。

田村先生、お願いします。

## ○田村

今、秋田先生がおっしゃったとおり、見通した少なくとも2年間のカリキュラムができ

てくるとすれば、小学校の側で参考になるのは、月があつて教科があつてみたい縦軸、横軸、単元配列表のイメージがあると思うのですが、幼児教育の皆さんは、年間を3期に分けるとか4期に分けるとか、5期に分けるという少しゆったりとした感じの流れがあると思うんですね。この辺のところは、やはり非常に参考になるんじゃないかなと思います。教科は既存のものがどうしてもあるので、一定程度やむを得ないと思いますから、その期というふうなものをもっと意識して、カリキュラムがつかれるっていうのは、とっても参考になるかなと思います。

さらに言うと、先ほど松村先生がおっしゃったように、共通の子どもたちをどんなふうに育てたいのかが共有できるといいと考えます。その際、どうしてもパッシブなイメージの言葉が多く出やすいんです。だけど好奇心を持つことは大事だよねとか、自分からチャレンジできる子になってほしいよねって言うポジティブなイメージの言葉を大事にして共有したいですね。よりアクティブなワードをちゃんと共有できるようにしていくことができると、カリキュラム上、何かがつながっていくのかなと思います。

こういったことをしていくためには、発想の転換が要ると思うのです。その際、これまでやってきたことだって大事なことがあるし、そのことって十分保証されるんですよというような言い方、あるいは、それがより有効になっていくことは、いつも押さえておかないと、多くの支持は得られないのではないのでしょうか。あるいは、より手軽にやれて、最後はやって良かったと思える状況をつくるっていうことが大事です。そこでは、やはり多様性が、この幼保小の間の大きな鍵になっていると思うんです。すると個別の学校だけではなくて、やはり行政の問題は非常に大きくなってくると思います。

行政のセクションの問題があるような気がしていて、例えば、静岡、横浜は、いわゆる政令市であるが故に、現場と行政の担当官が比較的近いポジションにいる傾向があると思うんです。この行政の仕組みをうまくつないでいくか、静岡、横浜辺りは、教育委員会と首長部局の担当者の連携接続、人事交流も行われているので、かなり関係が大きいんじゃないかなと思います。

幼保小の連携の話は、国民的な議論に展開していくような価値があることだと思うんです。とすると、文部科学省幼児教育課だけがやっている話ではなくて、文部科学省教育課程課はもちろん、文部科学省を越えて、それから経済産業省、厚生労働省、総務省、内閣府などが参画すべき話題だと考えます。日本の将来を考えれば、子どもたち一人一人がどんなふうにつかは重要な問題になってきているわけです。将来の国の姿に大きく関わ

ると考えるべきだと思います。

教育再生実行会議の12次提言のところにスタートカリキュラムの話も入れてもらったので、それは好ましいことなんだけれども、各省庁間にまたがる話題に転換していくことによって、国民的な話題にしていくことも大切ではないかと考えています。

○秋田 ありがとうございます。夢と同時に大きな課題も積みながらだなんて思いながら、伺っておりました。こども家庭庁のイメージ図が子ども子育て会でも出るのですが、そこでは就学前の指針は一本化されたものが図に描かれています。乳幼児期が一つのカリキュラムになり、それがまた小学校以降に一本化されていくような形が、今後うまく生まれていくといいなと思っております。この架け橋全体は、文部科学省が中心ですけども、今回初めて全部、指針や要領にも、幼児教育の推進の事業にも連携接続が全部に書き込まれるという方向へは動いて、準備がなされています。小学校担当の教育課程課も共に、これからもっと広い人たちが考えていく課題として、幼小の特定の低学年と5歳だけの話だけではなく、全体として一貫した教育課程や子どものイメージを創り出していく話なんだということが、とても大事だと思いました。今言われた、現状肯定をしていくことも、一方で大事で、それぞれの先生も頑張ってきていますよねっていう、その現状を生かすことで、うまく対話すればもっと良くなるんですよというメッセージをどう出していくのが大事であると、今伺いながら個人的な感想として持ちました。これからの幼児教育と小学校教育の接続についての在り方とか、本日の議論で2巡目ぐらい会話ができるといいかなと思っています。

どなたから口火を切っていただいてもいいんですが、中山先生でしょうか。お願いします。

○中山 国としての政策ということで、本当にそれはもう、わくわくしますね。そういう動きに子ども施策の一元化も含めて、ぜひ進んでいったらいいなと思います。

その一方で、田村先生がおっしゃった、その行政の仕組みですね。非常に興味深いです。横浜とかと比べて、いろんな状況の市や町があると思うんです。そういうところが、その置かれた状況によって、どういう行政の在り方になるのかっていうのは、非常に興味深いですし、何らか県やあるいは必要に応じては国のほうでもモデル事業等を通してお示しただけだと参考になるなど。なかなか誰がどこに手を付けていったらいいのか、また、われわれ民間の立場で何ができるのかとか、見えない部分もありますので、その辺興味深い一方で、どう関わっていったらいいのかなっていうところも、アドバイス頂けたらなと思

います。

それと松村先生が、カリキュラムができたらずやってみるっていうのは、僕もどっちかっていうとそういう考えに近くて、子どもの姿なくして、机上の空論では、なかなかイノベーションっていうのはないと思うので、どう子どもが変わっていくかというところを共有しながら進めていくというのが楽しいですし、実際になるほどと。今までのことが失われることもそんなになし、逆に効果的に学ぶ力が身に付いていっているねなんていうことが確認できたら、本当にそれは素晴らしいなと思うんです。

それからもし時間があったら教えていただきたいことが一つ。小学校の先生たちの仕事の仕方を十分理解していないのですが、校務分掌でいろいろ書き込む一方で、連携っていうんですか、年間計画で入れ込んでいかないと急には動けないんだと思うんです。われわれも、もうそういう仕事の仕方をしないといけないというふうになってきているのですが、そうすると、どの時期にどういうふうに計画を立てていくと次年度の計画に入れられて、そういった保育参観、授業参観とか、そういったカリキュラムに関する開発の研究会が持てるとか、その辺の仕事の仕方が分からないで、かなり無理言っちゃっているところもあるのかもしれないと思うので、その辺もちょっと実情こういうふうにしたら、小学校の先生は関わりやすいよとかいうアドバイスもお聞きできたらありがたいです。時間があったらお願いします。

○秋田 では松村先生お願いします。

○松村 はい。今の話でいくと、次年度の計画っていうのは、もう1月末、ちょうど今、教務主任が年間行事予定を作り終わったみたいな感じになっています。他の自治体は分からないのですが、1月の初めに教育委員会から説明があって、それを基に教務主任が年間の計画を立て、終わるのが1月末とか2月の初めぐらいのかなと思うので、研修会とか会議とかを入れ込んでいくのであれば、そこまでにアプローチしていくといいのかなというふうには思いました。

先ほど、田村先生の話からなのですが、2年間のカリキュラムを国でモデル事業を基につくっていくというときに、私は小学校は何となくイメージできて、3期とか4期に分けたときに、1期目は今あるスタートカリキュラムをかなり基にしていくのかなと思って、2期、3期っていうのは、ちょっと指導の在り方みたいなものを変えていくのかなとイメージはできるのですが、一方で5歳児のカリキュラムはどんなものが出来上がってきて、しかも今、園の状況が多様である中で、そのカリキュラムができて、どういうふうに効い

ていくのかなというのが、まだそこも今考え中なのかもしれないのですが、どんなイメージでいらっしゃるのかお聞きしたいなと思っています。

○田村 幼児期の教育はこれまでやってこられたことの良さとか強みとか、価値みたいなことを再確認してもらうことが大事なんじゃないかと考えています。

小学校に入学するために、この準備をしましょうではなくて、むしろ幼児教育のストロングポイントを強調して自覚するような形がいいのではないかと思います。

○松村 私も今の話はすごく納得なんですけど、本来の幼児教育とか保育の在り方を実現されている園は、それでいいと思うんですけど、やはりそうじゃないところに、そのストロングポイントを明確にして、どういうふうに効果的に効かせていくことができるのだろうかっていう、ちょっと実効性みたいな部分かもしれないのですが、ちょっとその辺り疑問だなと思っておりませんが、いかがでしょうか。

○中山 よろしいですか。すごくよく分かります。下手すると、現状やっているお勉強主義を強化しちゃうとか、あとは田村先生がそれは意図してないとはっきりおっしゃったけれども、一時、架け橋プログラムにも心配がされたように、小学校教育の前倒し的な誤解が生まれるっていうのは、やはりまだどこかに心配が残っているような気がするんです。なので、じゃあどうすればいいんだっていうのが、すぐに浮かんでこないのですが、例えば年長5歳児の1年間の教育課程をいつも見直していて思うのですが、やはり運動会があるから変わるのではなくて、その時期その時期のクラス集団を意識し、その集団の成熟度みたいなものを見ていくと、その時期その時期で園児たちが自己発揮できる。自分の意見を表明できる。本当に年長組5歳児、個性ありますけど、一人一人違いますけれども、なかなか主体的・対話的で深い学びっていったときに、大きな集団だと思っていること言えない時期っていうのがやはりありますので、そういう何か、今はその例ですが、思い付きなので。何かそういう期の捉え方みたいな、こうしろというまではなくても、そういう視点みたいなものが提示できると、うまくカリキュラムがつけられるのかなんていうふうに。それでやってみようっていうところにつながるわけですけども、ちょっと思いました。思い付きです。

○秋田 ありがとうございます。大変重要な点をご指摘いただいているなと私自身思うんです。この架け橋の話は、スタートカリキュラムの期間を少し延ばせないかっていうのは、無藤先生や私たちの、低学年教育も併せて変わってほしいという願いが入っているんです。実は幼児期の側っていうんでしょうか。5歳をどうカリキュラムをより強みを生か



せるのかっていうことは、本当に主体性とか協働で、子どもなりに、幼児期なりの探求活動や幼児期なりにルールをみんな考えて、遊びもそうだし、生活もそうなんですけど、作り上げていくようなことをしているのかという問いかけでもあるのです。その園や施設、制度のイメージによって実際にはこれらが随分違っている。そこをやはりここで、これをきっかけに各園が考えていくことも、私はとても大事だなと思いました。「保育園も小学校とこんなふうに連携しているんです」とか、「こども園もこんな交流をしています」という話は、たくさんあるのです。では5歳から1年の終わりまでの育ちをつないで、育てほしい10の姿にしていくために、5歳という時期が、小学校ではなく幼児期の園としてあるためにはどういうことが大事かも、併せて考えないといけないなということは皆さんに考えてもらいたいところです。架け橋委員会では、良質な保育や幼児教育をやっている園の先生ばかりが出ていますので、あんまり議論になりにくいところなのですが、実は大事だなと思っているところです。

プログラムを決めて時間割的な保育をやっている園の先生がそういう会議の場にあんまり来られることはないわけです。だからこそ園の幼児教育がうまくいっているように思いがちだけれども、そうではないなっていうのも、気付かされたような気もしたりしているところです。

ぜひ、これからの幼小連携・接続について、それぞれに展望と言うのでしょうか、期待することを2～3分でお話ください。これって、うまくまとまって終わる話でもないと思うのですが、ぜひお聞かせいただけたらと思っています。

今度は松村先生からとなっておりますので、最後のまとめのところ、いかがでしょうか。

## 6. 【総括】幼児教育と小学校教育の接続についてのこれからへの期待や方向性

○松村 今日には本当にありがとうございました。

最新情報から園の様子まで何うことができて、とても勉強になりました。

私としては、自分が低学年で実践をしていた頃は、自分の実践を頑張り、それを発信するっていうのが基本スタイルでやってきたんですけど、こうやって低学年の担任から離れて、じゃあ自分に何ができるのか、自分の学校だけじゃなくて、どうやって広げていくか、また田村先生から自治体みたいな話もあったのですが、すごくマクロな見方から、でもやはり一つの教室とか、1対1の関わりもきちんと大切にしていって、本当に視野が

さまざまで、幼保小連携というのはとてもやりがいがあるところだなとあらためて思いました。

架け橋プログラムが、この後どうなっていくかっていうのが、非常に外から見ている人間からすると興味深いですし、楽しみでもあるけれども、やはりそれを学校とか園で実現させていくってところが一番難しいと思うので、そこで自分ができることは何なのかなということを考え続けていきたいと思います。

以上です。ありがとうございました。

○秋田 ありがとうございます。中山先生、いかがでしょうか。

○中山 どうも今日はありがとうございました。

あらためて、架け橋プログラムというものが一つの大きな契機になるなど。自分自身も、今、園長ではなくて理事長という立場で、少し俯瞰して物事を見る立場ではあるのですが、本当にそのプログラムを通じて、現場の先生たちとのやりとりや、あとは親たちですね、保護者ともっともっと話をしていきたいっていうふうに今思っています。

その上で、行政と関わる上で、なかなか私の地元の佐野市は、行政がリーダーシップ取るタイプではないので、いろんなタイプがあるので、佐野市の場合はそうなので、佐野モデルみたいなものを少しでも発信できたらと思います。すみません、現場からボトムアップしていくような、そういうモデルが何かしら、もしかしたら示せるかもしれないなと思っています。

どうも今日はありがとうございました。

○秋田 田村先生、いかがでしょうか。

○田村 一言で言えば、いかに多様さに対応するかということを考えました。その意味では、やはり義務教育や、高校とは違う状況がこの幼児期の教育にはあるということです。

まずは目の前としては、頑張っている、とても良質な幼児期の教育と、あるいは頑張っている、とても良質な小学校低学年教育があったとして、こここのところが結び付くことによって、迂回しながら、近隣の小学校や幼児期の教育が変わっていくことを期待すれば、いくらか多様性にも対応できるのではないかと考えました。多様性への対応としては、ダイレクトではなくて迂回ルートみたいなものと思ったんです。と考えると、今回のこの議論に、もっと小学校のプレイヤーを出してくることが重要なポイントで、その意味では文部科学省の教育課程課はもちろんですが、いろんな小学校の関係者がもっともったこの議論に入ってきて、いわゆるトップリーダーの校長先生が、ここにかかる比重や価値を、学

校経営上かなり高く持てるようにするのが大事かなと思いました。

外的なものとして、少なくとも、このスタートカリキュラムなり、1年生なり2年生と幼児期がつながるようなカリキュラムをカリキュラム・マネジメントと連動する形で進めるべきでしょう。高校のカリキュラムがスクールミッションを宣言しなきゃいけないと言われているように、小学校も同様のもの求められることが欠かせないと思います。

と同時に、それを運用していく人が位置付けてくるといいと考えます。幼保小の連携と接続に特化したカリキュラムをデザインすることのできるコーディネートする人材の育成と、その人的な保証が同時にできると、さっきの迂回ルートも、少し実現可能性が上がって、架け橋が、18歳までの架け橋になっていく可能性が出るのではないかなと考えました。

○秋田 どうもありがとうございます。本当にお三方の先生方から、大変刺激的なお話をいただきました。

今、田村先生が言われたお話の、迂回ルートというお話を聞きながら、座長の無藤先生が、架け橋って幼児期から一方的に橋を架けるのではなくて、両方から橋を架けるから架け橋になるんですっていうことを、あるところで強く言われていたのが印象的でした。やはり当事者意識でそれぞれが動けるような仕組みを、今後どうつくるのかと、私自身伺っていて思いました。担任を持たれているそれぞれの先生方も自分事になるし、でもたぶん多くの皆さんはモデル事業の園が、自治体がやってくれるんでしょっていう他人事の間をいかに防ぐかっていうのが大事だと思っています。全国でやるんですよっていう気運を、今一生懸命つくろうとしています。全国で小学校も含めてやっていくんですよっていうメッセージをアドミッション・ポリシー的なものの中に、やはりトップ層に考えていただくところも今伺っていて、とっても大事だと思いました。それぞれができることを、自治体も多様だし、学校や園も多様な中で、どこをポイントに今後考えていくのか、私どもはモデル事業だけではなくて、全国のプラットフォームのホームページなどで、各自治体や各所の面白い取り組みが挙がってきて、わくわくしながら共有できるようなオンラインの仕組みづくりも大事だと思っています。どうやって今、これからの時代を、従来の指定を受けてやって終わったから報告書出して、それを普及啓発のモデルとして実施するというような形ではない形に、皆が一緒に開発していく形ができるのかを、今後また考えていかなければならないなと思っています。それぞれの先生方の取組に刺激を受けながら、私もその中の一人 (one of them) として、また考えたいと思います。先生方や多くの全国の園や学

校の取り組み、自治体の取り組みからさらに学びたいと思っています。

今日はこれで締めとさせていただきたいと思います。ありがとうございました。

そして事務局のほうにお返しし、鍛冶さんのほうからお話しいただければと思います。  
よろしく願いいたします。

## ○鍛冶

初めまして。日本教材文化研究財団の事務局の鍛冶でございます。

本日は本当に長時間にわたりまして、貴重なお話を賜り、充実した内容の座談会となりましたことに御礼を申し上げます。

今日座談会を聞くに当たりまして、文科省の架け橋プログラムにある資料で、お話の中にもありましたけれども、幼小の連携交流というアンケートでは、6～7割が行事等であるというデータ結果が出ておりました。このような知識の中で、今日の座談会に参加させていただきました。

先生方のお話の中で、腑に落ちるといいますか、現場の先生方のお話を聞いて、いろいろなことを学ばせていただきました。

そこで今日の内容を考えまして、これからの財団の研究テーマの方向性としまして、微力ながら、財団から全国へご発信できればと思っております。そのために今日の財団の座談会にご縁といたしまして、今後ともご指導、ご協力を賜りたく思っております。

最後になりましたが、このたびご参加をいただきました、秋田先生、それと田村先生、中山先生、松村先生の皆さま、楽しい時間をどうもありがとうございました。本当はお会いしていろいろお聞きしたいこともいっぱいありますけれど、それは次の機会ということで、どうぞよろしくお願い致します。ありがとうございました。